



令和3年度

第31回島根県雲南市

永井隆 平和賞

|入|賞|作|品|集|

島根県雲南市教育委員会

目次

Contents

小学生低学年の部

- 最優秀賞 ふつうって、しあわせだな
優秀賞 いっしょにはしるとたのしいよ
佳 作 わたしにもできるかな
佳 作 みんながえがおになるために
佳 作 によこどうを見て思い出すよ

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立鍋山小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

島根県・雲南市立掛合小学校

島根県・雲南市立三刀屋小学校

勝部利音

古田悠樹

陶山愛

佐々本琉雅

中西皐月

小学生高学年の部

- 最優秀賞 遺骨と私たち
優秀賞 自分らしさを大切にして
佳 作 あたりまえを感じる心

沖縄県・糸満市立糸満南小学校

島根県・雲南市立西小学校

島根県・雲南市立阿用小学校

上原諒

内田七夢

勝部瑠望

中学生の部

- 最優秀賞 「平和」のために
優秀賞 一つの命を何度も殺す
佳 作 「食と命」
佳 作 命のつながり

島根県・島根大学教育学部附属
義務教育学校後期課程

沖縄県・西原町立西原中学校

島根県・雲南市加茂中学校

沖縄県・糸満市立高嶺中学校

レイフィールド
快

来海良宣

山城万奈美

高校生の部

最優秀賞 如己愛人く力の文明から愛の文明へく

優秀賞 残されたもの

佳作 生きることとは幸せなこと

佳作 愛は平和のために

佳作 握られた想い

佳作 永井隆博士の遺産

広島県・盈進高等学校

島根県・島根県立三刀屋高等学校

沖縄県・KBC学園未来高等学校

島根県・島根県立平田高等学校

埼玉県・芝高等学校

鳥取県・鳥取県立米子東高等学校

伊藤 藤咲夢

中村 瑞葉

砂川 安笑羅

田中 悠真

中山 公太郎

藤井 みどり

一般の部

最優秀賞 繋がり

優秀賞 あの子らの丘で

佳作 こころと言葉

島根県

長崎県

島根県

宮本 文子

立木 英夫

板持 佳奈

最優秀賞

ふつうって、しあわせだな

島根県雲南市立三刀屋小学校一年

勝部利音 かつべりおん

七がつ十二にち、がっこうにとっこうしてから、すごいお
おあめがふりました。かみなりもいっぱいになりました。お
あめがどんどんひどくなつて、とうとうおかあさんがむかえ
にきてくれることになりました。おかあさんとかえるとちゅ
うも、かみなりがちかくにおちたようなおおきなおとがして、
とてもこわかったです。

いえにかえつて、にもつのじゅんびをして、おかあさんと
おとうととわたしでひなんじよへいきました。おとうさんは、
しごとでやまがくずれたところをなおしにいていたそう
です。おばあちゃんは、おおきいおばあちゃんをむかえにい
たら、どうろにみずがいっぱいあつて、くるまがとおれず、
ひなんじよにこれませんでした。

ひなんじよにいるときに、しんぱいなきもちがどんどんお
おきくなりました。おとうさんやおばあちゃんたちはだい
じょうぶかな。いえはだいじょうぶかな。いえにランドセル
をおいたままだけど、あしたはがっこうにいけるかな。がっ

こうもだいじょうぶかな。そんなとき、ひなんじよにきてい
たともだちとじゃんけんをしてあそんだり、そうごうセン
ターのかがたが、ほんのよみきかせをしてくれたりしました。
ちよつとげんきになりました。

ゆうがたになると、あめがやんで、いえにかえることがで
きました。とつてもうれしくなりました。

おうちつていいな。かぞくつていいな。ともだちつていい
な。がっこうにいけるつていいな。ふつうって、しあわせだ
な。

ながいたかしはかせのべんきょうをして、へいわについて
かんがえました。いつもどおりに、かぞくでおいしいごはん
をたべたり、がっこうへいって、ともだちとべんきょうをし
たりあそんだりできることがへいわかなとおもいました。

優秀賞

いっしょにはしるとたのしいよ

島根県雲南市立鍋山小学校一年

古ふる田た悠はる樹き

「ごがつに、ろうどれえすたいかいがありました。なべやましようがつこうにはいって、はじめてのろうどれえすたいかいでした。どれくらいはしるのかな。どこをはしるのかな。いろんなことがしんぱいになりました。ほんばんまで、まいにちぎようかんやすみに、こうていをはしります。おにいさんおねえさんやせんせいたちも、みんなではしるから、ちよつとどきどきしました。一ねんせいは、三しゅうはしります。でも、こうていはひろいから、とちゅうでくるしくなってしまう。もうはしるのをやめようかなとおもったとき、ともだちのこうきくんが、

「いっしょにはしろう。」

とさそってくれました。それから、まいにち、こうきくといっしょにはしるようになりました。ふたりではしると、ひとりではしっているときよりも、たのしいきもちになりました。

「もう一しゅうはしるか。」

と、こうきくんがさそってくれると、くるしくても、とまらずにはしることができました。ちがうひには、ふたりでめあてをきめてがんばりました。はしりおわると、あせびっしりでつかれたけど、いっしょにかあどをぬるのが、とてもうれしかったです。

ぼくは、はじめてのことだとしんぱいになることがありません。でも、ひとりより、ともだちといっしょにがんばると、うれしいし、たのしいし、がんばりばあがいつぱいになるんだなおもいました。にがてだなおもうこともあるけど、こうきくんとはしったときみたいに、ともだちとおうえんしあいながら、がんばりたいです。そして、ぼくも、しんぱいしたり、こまったりしているともだちをおうえんできるようになりたいです。

佳作

わたしにもできるかな

島根県雲南市立三刀屋小学校一年

陶山愛 すやまめぐみ

わたしがしようがっこうへにゆうがくするまえ、おとうさんがたけでとうろうをつくっていました。たけのなかにろうそくをいれると、「へいわを」のじがみえるようにあながあけてありました。よるになって、いいししようがっこうにとろうをみにいきました。たくさんとうろうがならんで、ひかっついてとてもきれいでした。

みとやしようがっこうにも、「へいわを」とかいたじがかざってありました。あのとうろうとおなじことばです。このまえ、ながいたかしはかせのかみしばいをよんでもらいました。「へいわを」は、はかせのことばとはじめてわかりました。はかせはじぶんがけがをしたり、おくさんがなくなってすぐかなしかったりしたのに、ひとにやさしくしておられます。じぶんがたいへんなときでもひとにやさしくすることが、「へいわ」につながるのかなとおもいました。

わたしがせきでがっこうをやすんでいたひ、あめがつよくふってかみなりもなりました。そして、いえのうしろのかけ

がくずれました。きゆうにていでんにもなりました。そのあとはこわくてあまりおぼえていません。

わたしのいえは、だんすいといってみずがでませんでした。いつもはおもわなかったけれど、みずってだいじです。せんたくもできなかつたし、おふろにもはいれませんでした。とてもたいへんでした。かぞくもたいへんでした。

はかせのことをおもいだすと、わたしはじぶんがたいへんなときに、ひとにやさしくできたのかなとおもいます。あまりできなかつたかもしれせん。

わたしにもできることはないかな。いえのくつそろえをがんばろうかな。みんながえがおでせいかつでできることがへいわってことかもしれないね。

佳作

みんながえがおになるために

島根県雲南市立掛合小学校二年

佐々本 琉雅
ささもと りゅうが

二年生になって、ぼくは、はじめてながいたかしはかせのことを知りました。ながいたかしはかせは、せんそうで大きなけがをしたのに、じぶんの手当てをあと回しにして、ほかの人の手当てにあたりました。

大きなけがをして、いたくてしんどかったはずなのに、じぶんのことより、人のことをゆうせんしたところが、すごいと思いました。ぼくだったら、じぶんのことしか考えられなかったと思います。

ぼくは、たまに友だちとけんかをしてしまう時があります。この前は、休み時間にりん車をしていたら、友だちが何ども「かわって。」と言ってきました。ぼくは、まだあそびたかったので、「やだ。ほかの人にかわってもらつてよ。」と言いました。そこから、けんかになってしまいました。でも、ぼくは、わるくないと思ってあやまりませんでした。

少ししてから、どうしてけんかになってしまったのか考えてみました。すると、ぼくは、じぶんがあそびたい気もちばかりを考えて、友だちの気もちを少しも考えてあげることが

できていなかったことに気がつきました。もし、みんながなかよくあそべる方ほうを考えていたら、いやな気もちになる人もいなかったと思います。じぶんだけがたのしくても、友だちがいやな思いをしていたら、やっぱりじぶんもたのしくないと思いました。

ちがう日の休み時間、ぼくは体いくかんでみんなとドッチボールをしてあそびました。本当は、おにごっこをしてあそびたかったけど、少しがまんしてあそびました。ドッチボールはじぶんのやりたいあそびではなかったけど、みんなといっしょにあそんで、とてもたのしかったです。ドッチボールをしているとき、みんなのかおはずっとにこにこしていました。みんなのにこにこしたかおを見てぼくもうれしかったし、やりたいあそびをがまんしてよかったと思いました。

はじめは、どうしてながいたかしはかせが人のことをゆうせんでいいのか、ぼくには、わかりませんでした。でも、今なら少しわかるような気がします。きっと、ながいたかしはかせは、みんながえがおでいることがうれしかったのだと思います。

ぼくも、みんながえがおになるように、これからど力していこうと思います。あいての気もちを考えたことばづかいや行どうをしたり、少しがまんしたりすることもふやしていきたいです。

佳作

によこどうを見て思い出すよ

島根県雲南市立三刀屋小学校二年

中^{なか}西^{にし}阜^さ月^{つき}

ぼくは、まい日、によこどうを見ています。家の外に出たとき、家へかえるとき。家の外を見れば、いつでもによこどうが見えます。小さいころは、何か分かりませんでした。ぼくは、家だと思って見ていました。お父さんが「うしろは、ながいたかしきねんかんだよ。」と教えてくれたので、ぼくの家のうしろは、ながいたかしきねんかんだとしていました。でも、ながいはかせやによこどうのことは、何も知りませんでした。

一二年生になって、生活科でいいしたんけんに行ったとき、ながいはかせのことがよく分かりました。新しくなったきねんかんや生い立ちの家へ行つて、ながいはかせのことをたくさん教えてもらいました。ながいはかせって、そんなにすごい人なんだと思いました。ぼくがいつも見ているによこどうは、ながいはかせがくらしていた場所よだと知りました。本ものは、ながさきけんにあるそうです。あんなに小さいのに、あそこでたくさんの本を書いたんだな、いろいろな人と会っていたんだなと思いました。ながいはかせのことをしつて、はかせは、いつでもへいわのことを考えているなと思いました。じぶんもちが出ていっているのに、みんなをあいつて、たくさ

んの人をたすけたからです。びよう気になってからも、によこどうで十七さつもの本やことばをのこしていました。みんなにへいわの大切さをつたえたかったからだと思います。

ながいはかせのことをしらないときは、によこどうを見ても何とも思いませんでした。今は、によこどうを見ると、ながいはかせのことが思いうかんできます。ながいはかせのねがいを思い出します。ながいはかせは、いつも「によこあい人」の気もちをもっていました。いつもへいわをねがっていました。ながいはかせのように、みんなのことをあいつ、みんなのいのちを大切にしながら、へいわをつくつていきたいと思っています。

でも、によこどうを見るのがはずかしい気もちになるときもあります。友だちとけんかしたときです。ぼくは、言いたいことがあつてもことばで言わずに、あい手をたたいてしまったことがあります。じぶんもあい手もいやな気もちになりました。ながいはかせは、によこどうでかなしんでいたと思います。友だちに言いたいことがあるときは、ことばでつたえたり、あい手とよく話したりするようにしようと思いましたが、それができたら、ながいはかせもによこどうでわらっていると思います。ぼくも、にこにこえがおでによこどうを見ることができそうです。

ぼくは、これから、まい日によこどうを見ます。いつもえがおで見られるようなまい日にしていきたいです。そして、によこどうを見たとき、ながいはかせに「今日もによこあい人ができたよ。『へいわを』をわすれていないよ。」と言いたいです。

最優秀賞

遺骨と私たち

沖縄県糸満市立糸満南小学校四年

上原諒

私は、今年の一月まで犬をかっていました。名前はルン。めつたにほえないやさしい犬でした。十八才だったから、人間にたとえたら八十八才。ルンは私やお姉ちゃんが生まれるよりも先にうちにいたので、お兄ちゃんのようなそんざいの大切な家族でした。亡くなったルンを火葬う場に運び、骨を拾ったとき、

「骨ってこんなに細いんだ」と思いました。今、ルンの骨は、仏だんでおじいちゃんおばあちゃんといっしょにいます。

私は対馬丸記念館の合唱団に入っています。記念館には昔の教科書やランドセル、対馬丸に乗って帰って来られなかった子ども達やその家族、先生の写真がかざってあります。私と同じくらいの年の子ども達の骨は今も深い海にしずんだまま「助けて」と言ってる声が聞こえるようです。

私が住んでいるのは、沖縄島が一番南にある「ひかりとみどり」といのりのまち」糸満市です。昔から、「海人の町」と言われていて、港ではハーレーという船をこぐきょうそうや、十五夜には大つな引きがあります。自然も豊かで、太陽の光がキラキラと青い海を照らし、畑には野菜や果物が実り、校庭の月桃は長い葉を上げらせ、白い花をさかせています。

七十六年前、二十四万人以上がなくなった沖縄戦がありました。糸満は、兵たいとにげまどう住民をまきこんだ一番のげき戦地となりました。だから糸満には戦争のいれいひがちこちにたくさんあります。

戦後、野ざらしにされていた「遺骨」三万五千柱を集めて作られたのが、魂魄の塔です。ここでこんなにもたくさんの方がなくなつたとは思えないくらい、今は静かにいのりをささげる場所です。ここでなくなつた人と、その遺骨をさがし求めている家族のなみだがしみこんでいます。しかし、この糸満の土が辺野古の米軍基地を作るためのうめ立てに使われようとしています。

遺骨を見たことがない人は、悲しい気持ちにならないかもしれません。だから一度、沖縄のこの景色を見てほしいです。七十六年前の遺骨は、まるで小石やサンゴのかげらのようにそこにあります。沖縄の海と島には、まだ数多くの遺骨がうまつていて、私達はまだ見つけられない遺骨の上で今を生きています。

遺骨が暗やみの中で光をあびられないなら、私達が希望の光になりたいです。戦争中、戦争の後、沖縄でどんな事があつたのか、私はもつと知りたいし教えてほしいです。そしてまだ知らない人に伝えていきたいです。身近な生き物の命を大切に、沖縄のかけがえのない自然を守っていききたいです。だれでも自分の生きる道が自分らしく歩めるような世界にしていきたいです。沖縄戦から学んだ「命どう宝」という希望の光が集まれば、世界中の平和のかけはしになれると思います。

優秀賞

自分らしさを大切に

島根県雲南市立西小学校六年

うち
内田七夢

私には、いつも見ている、お気に入りのユーチューバーがいます。ある日、いつものように見ていると、ある動画が目にとまりました。内容は、自分は性同一性障害であると発表している動画でした。

性同一性障害って何だろうと思って調べてみました。すると、体は女性だけど、心は男性、その逆もあって、体は男性だけど心は女性というように、自分の体と心の認しきに違和感があることだとわかりました。

動画の内容をまとめると、過去にとってもつらいことがあったけど、今は前を向いて進んでいけるというような内容でした。自分が性同一性障害だということを発表するのはいやで、何度も考え直したそうです。でも、自分に自信をもって生きていくために発表したそうです。過去に、悪口や人がはなれていくような悲しい体験があったにもかかわらず、いろいろな反きようがあることを覚悟した上で発表していました。自分らしく生きることを選んだのです。とてもかっこいいと思いました。

動画を見終わり、コメントらんを見ていると、「だいたいようぶだよ。」「これからもがんばって。」「などのコメントがた

くさんありました。心無いコメントもありましたが、心あたたまるようなコメントがあつとう的に多かったです。そして、このようなコメントもありました。

「性同一性障害は、障害の分類から外されて、一つの個性になりました」

私は、このコメントを見て、感動しました。その人らしさを尊重していてすごいと思いました。女らしさ、男らしさ、言葉づかい、服そう、そんなものにとらわれず、一人の人として相手を見ることのすばらしさに気づかされました。

動画を見た数日後、学校の帰りに中学生に会いました。女の子でしたが、制服はスカートではなく、長ズボンをはいていました。その人は、自分らしさを大切にするために、スカートではなくズボンを選んだのだと思いました。もう一つ、その中学生を見たときに思ったことがあります。私は思わず、「女子なのに、長ズボンをはいている」と思ってしまいました。それが悪いとか変だということではなく、ただ、「長ズボンなんだ」と思ったのです。でも、この世の中で生きづらさを感じている人が、自由に生きやすい社会にするためには、長ズボンをはいている女の子を見たときに、何も思わないくらいでないのだめなのではないかと思いました。

私は、自分らしさを大切にするために、人の意見に流されず、自分の意思を貫きたいと思っています。そして、相手のこともその人らしさを尊重して見ていきたいと思っています。

それが当たり前になり、みんなが生きやすい世の中になればいいと思います。

佳作

あたりまえを感じる心

島根県雲南市立阿用小学校六年

勝^{かつ}部^べ瑠^{たま}望^み

「行ってきます。」

私は、いつものように家を出て学校に向かった。

しかし、お寺の前を通りかかった時、この日はなぜか看板に書かれたある言葉が気になった。そこには、「なぜ人間は、あたりまえを喜ばないのでしょうか。」と書かれてあった。

学校に着くとすぐに辞書を手に取り、「あたりまえ」という言葉の意味を調べてみた。するとそこには、「ふつうであること」と書かれていた。

「ふつう」って何だろう。思いつくのは、生きていること、食事ができること、家族がいること、手足があること、目が見えること。けれど、世の中には、手足が不自由な人もいるし、目が見えない人もいる。食事はおろか、家族と過ごすことすらできない人もいる。

ふつうって何だろう。私は、ますます混乱してきた。今まで私がふつうだと思っていたことは、私にとってのふつうであって、みんなにとってのふつうではないのかもしれない。「あたりまえ」だと思っていたことは、決してあたりまえではなかったのだ。

そんなことを考えていたら、平和学習で学んだヒロシマの

風景が頭に浮かんできた。一瞬で何もかもを奪ってしまった、あの原爆の風景だ。

原爆が落とされる前は、きっとみんないつも通りの幸せな生活をしていただろう。けれどそんな暮らしが、たったひとつの原爆で変わってしまった。

現在、世界中で流行している新型コロナウイルスも同じだ。コロナが流行る前は、みんな思いっきり楽しい生活をしていただのに、今は様々な制限がかけられ、思い通りの生活ができなくなっている。感染した人は、さらに苦しい。自分だけでなく、家族までも「あたりまえ」の生活ができなくなる。そんな時、どんな気持ちになるのだろうか。不安なんだろうか、怖いのだろうか。

原爆で亡くなった人やコロナで苦しんでいる人のことを考えると、私は「あたりまえ」の生活ができるのは、とても貴重なことなのかもしれないと思えてきた。

今、私は、世界中の人々に言いたい。

「今こそ、あたりまえであることへの喜びやありがたさを感じよう。」

と。ピンチはチャンスに変えられる。私たちは、今こそあたりまえの大切さに気付くべき時なのだ。そうすれば、今よりずっと幸せな人が増えるはずだ。

戦争のない世の中、差別のない世の中、食べ物を粗末にしない世の中。そんな社会を築いていくことが、私の願いであり希望だ。そのために、まずは私が、しっかりと「あたりまえ」のありがたさを感じる心を磨くとともに、他の人のあたりまえにもきちんと目を向けられる人でありたい。

最優秀賞

「平和」のために

島根大学教育学部附属

義務教育学校 後期課程 九年

片岡瑞彩

去年の夏休み明け。配られた学年通信には「赦し難きを赦す」という題がついていました。衝撃を受け、書かれた文章に引き込まれていきました。そこには、戦後、平和を求めて、島根県から一人で嘆願書を送り続けた画家、「加納莞菴」について書かれていました。

莞菴が嘆願書を送ったのは、フィリピンノキリノ大統領です。キリノ大統領は妻と三人の子供、五人の親族を日本兵に殺されました。その大統領に、「平和のためにも赦す勇気を持って欲しい」とフィリピンにいる日本人戦犯の釈放を求めて嘆願書を送り続けたのです。そして、キリノ大統領は「決して赦すことのできない」相手である日本人を赦しました。

「家族を殺されて赦すなんて私には絶対できない。それをお願いする人なんて、どんな絵を描いていたのだろう。」と黙っていた私に、母が

「今度の休みに一緒に加納美術館にいつてみよう。」
と言ってくれました。

美術館に行く前は、莞菴は家族の大事さが分からないから無理なお願いをしたのだ、と思っていました。しかし、莞菴の絵は、家族を大事に思い、地域社会に根差した、私たちと変わらない生活をしている方だと分かる、優しい絵でした。絵は白の使われ方がすごくきれいでした。絵を一枚一枚みている私に

「莞菴は白の使い方が上手でしょう。」

と、ある人が話しかけてくださいました。その人は名誉館長であり、加納莞菴の四女である加納佳世子さんでした。美術部に入っている私に、色々なお話をしてくださいました。父親の話をされる佳世子

さんには、平和のお話をされる使命感のあるお顔と、娘としてのお顔がありました。

莞菴とキリノ大統領の話の時、佳世子さんは「赦し難きを赦したキリノ大統領は日本に大きな課題を与えた」と話されました。さらに「それは大統領からの「復讐」とも言える」と言われました。「復讐」という怖さも伴う言葉は、私の心に深く突き刺さりました。

「平和のためには武器ではなく、大きな思想をもたなければならぬ」と

莞菴の言葉です。平和を求め大きな思想のもと行動することが、キリノ大統領から私たち日本人に与えられた課題なのです。紛争や内戦が繰り返されていることを考えると、終わりの見えない課題です。その責任の重さから、佳世子さんは「復讐」という言葉を使われたのではないかと考えるようになりました。

私が加納美術館を訪れた後、一月に核兵器禁止条約が制定されました。条約に批准した国が五十に達したためです。しかし、唯一の被爆国日本は批准していません。キリノ大統領から大きな課題をもたらしているのに、なぜだろう、という気持ちになりました。また、この一年、コロナ禍の影響が全世界に広がり、差別や偏見、今まで聞いたことのない「自粛警察」などの言葉を当たり前のように見聞きするようになりました。感染すると誹謗中傷に傷つき、社会復帰がままならないこともあります。ワクチンの奪い合いも世界で起きています。そんな中、配られた教科書を見ると、加納莞菴のことが載っていました。それをみてハッとしました。島根からたった一人、平和を求め嘆願書を送った加納莞菴。国に任せっきりにするのではなく、こんな時こそ私たちが、与えられた課題を解決していくべきではないか、と思ったのです。

平和というのは、国や国連が作るのではなく、一人ひとりのゆるぎない意識によって作られると思います。平和のための大きな思想。それを持ち続けるためにも、中学生の今、受けられる教育を大切に、冷静な行動をしていきたいです。そして、あらゆる分野で平和的な解決の方法を模索し、実践する大人になりたいと思います。

優秀賞

一つの命を何度も殺す

沖縄県西原町立西原中学校二年

レイフイールド

快かい

僕が住む西原町は実に平和な町だ。小鳥のさえずりが聞こえ、緑豊かで高台からは海が望め、子ども達が元気に遊ぶそんな町だ。

しかし、七十六年前は一面に瓦礫が散らばり大地は血で赤く染まり、人々の叫び声が聞こえ赤ん坊の泣き声が響いた。日本軍は首里にある司令部を守るため、当時の西原村を盾にして米軍と戦った。そのため、西原村では村民の四十七%にあたる五千三百人が犠牲になり、一家全滅はこの村だけで四七六世帯になった。しかも、この犠牲者の中には日本軍の暴行により殺害された住民もいたというのだ。僕は犠牲者の数に驚くと共に、軍隊の横暴のために一般住民の命が失われた、という事実には衝撃を受けた。「戦争」では、住民が戦いに巻き込まれるだけではなく、軍隊の理不尽な行動によって命を奪われてしまうのだ。

『バグダットの靴磨き』という小説を読んだことがある。これはイラク戦当時のバグダットで米軍に家族を殺害され、復讐を考え始める少年の物語である。僕はこの小説を読んで、軍隊というものに対する強い怒りと悲しみを感じた。兵隊でもない無抵抗の市民になぜそのような残酷なことをするのか、僕には理解できない。軍人とは全く非人道的な生き物である。人命を軽視し、かけがえのない家族を殺された人々の悲しみを少しも感じない軍隊に憤りを感じる。少年は米軍に対する復讐を決意するのだが、僕も彼の立場だったらさっさと同じ事を考えるだろう。

これは小説の中の話にすぎないのだが、沖縄戦での無抵抗な住民の犠牲は実際にあった出来事である。日本軍は沖縄を米軍の日本本土侵攻を遅らせるための捨て石にした。そのため、沖縄では軍人を

含め約二十万もの尊い命が犠牲になった。そのうちの九万四千人は沖縄に住む一般住民だ。日本軍は住民に米軍への恐怖心を植え付け、投降することを許さず、自決するように呼びかけた。そのせいで助からなかった命が多く存在する。

沖縄の人々はこの沖縄戦の教訓を胸に、もう二度と悲惨な戦争を起さないこと、そして、戦争につながる行為には協力しないことを誓った。それには新たな軍事基地への反対も含まれる。しかし、県民の心を踏みにじるかのように現在も名護市辺野古での新基地建設は強行されている。莫大なお金と時間が必要だというのだ。さらに問題なのが、この海を埋め立てるために沖縄戦の激戦地区で未だ多くの遺骨が眠る沖縄本島南部の土砂を採取しようとしているのだ。その南部の土を新基地建設に使用し、基地の下で永遠に眠らせることは、戦没者を二度の死と更なる永遠の苦痛を与えることとなる。そもそも、自然をも崩壊させる新基地建設を辞めるべきだが、輸送が楽だからといって、南部から土砂を採取し埋め立てに使うのは、戦没者への人権侵害だと考える。戦没者の人権を考慮すれば、このようなことは決してできないはずである。

僕は普天間基地はどこにも移設せず、閉鎖すべきだと考えている。もし、どこかに移設すればまた、基地負担に苦しむことになり、ひとたび戦争が起きればそこが戦場になる可能性が高まるだろうと考えるからだ。沖縄県民は静かな暮らしを求めているだけなのだ。

沖縄戦から七十六年がたち、戦争体験者が減る中、沖縄戦の記憶をどう受け継ぐかが課題となってくる。僕達のような若い世代が戦争や基地問題について関心を集め、解決策を考え続けることが、基地問題を解消し戦争のない平和な未来を迎えるために大切なことだろう。これからは、僕たちが戦争の恐ろしさ、軍隊の冷酷さについて正しく理解したうえで、次の世代へ語りついでいかなければならない。

今もこの地球のどこかで戦争によって苦しめられてる人がいる。この地球の未来を戦争という呪縛から守ることが人類の大きな挑戦だと僕は考える。

佳作

「食と命」

島根県雲南市立加茂中学校一年

来^き海^ま良^よ宣^{のぶ}

「かわいそう。」

僕が小学3年生のとき、小さなアジを釣りに行ったときのことです。その日はたくさん釣れていて、父も弟も楽しそうに釣りをしていました。そんな僕は釣られた魚の入った水そうを見ていました。つい数分前、数十分前には広い海を泳いでいたのに。なのに釣られてしまったためにせまくて苦しい水そうの中に入れられ殺されてしまう。魚がかわいそうだと思います。今でも死んでしまいそうな魚の目は忘れられません。

そして釣りが終わり家へ帰りました。魚を食べるには魚を殺した後、エラや腹ワタをとったりなどの下処理をしないといけません。僕が丁度台所の前を通りかかったとき、母が下処理をしていました。アジたちが並べられ次々にエラを外し腹を開かれていきました。母の手は魚の血がたくさんついていました。僕は自分たちに釣られたせいでこうなったのだと、強い罪悪感を感じました。

その時から、あれほど楽しかった釣りが楽しめなくなり、魚や肉などを食べるのをためらってしまうようになりました。魚がさおにかかりさおがふるえる感覚も魚が生きるために必死にもがいているのかと思うと楽しくありません。誰だつて魚が必死にもがいていると思うと楽しくはないはずです。魚や肉を食べるたびに「相手にされて嫌なことは人にするな」という言葉が頭をよぎりました。自分がこの肉だったら。自分がこの魚だったらと考えていました。

それからは、給食が終わり余ったご飯やみんなが残したご飯を汁の食缶に入れ給食センターへ返すとき残ったご飯を見て、毎回毎回

申し訳ないと思っていました。

中学一年生になり理科の授業で動物の分類をするとき、イカ・エビ・イリコの解剖をしました。自分にとっても解剖は初めての体験でした。イカなどの体を切つて分解して観察しました。自分がイカやエビだったらと考えて嫌な気分になっていました。観察するためだけに海から陸にあげられ殺され、その上

「変な臭いがする。」

「気持ち悪い。」

などと言われてイカたちも感情があれば悲しんでいたと思います。その時、先生が

「解剖が終わったら、もとあった形に戻せるだけ戻して、感謝を込めて終わらしましょう。」と、言われました。もしイカに感情があったとしても少しは悲しい気持ちやわらぐと思いました。

海で泳いでいて釣られてしまった魚に感情があったとしたら。釣られた後、粗まつに扱われ、きとうに食べられ、残りを残飯として捨てられてしまったとしたら。きつと魚も悲しんでしまう。逆に釣られた後も丁寧な扱われ「いただきます」「ごちそうさまでした」と言われ感謝して食べられたら。魚も少しは報われると思います。

魚やイカなどの動物を殺すと、その動物はきつと悲しみます。でも自分達が生きていくには仕方の無いことで、家や学校で出てくるご飯も漁師や肉屋の人などが殺したものを食べています。それなら自分達には何ができるのでしょうか。僕は「いただきます」「ごちそうさまでした」と言つて残さず感謝して食べることだと思います。そうすれば魚も少しは報われると思います。

僕は命をいただくという意識がうすれていると思います。僕も普段の食事では命をいただいているという意識がありません。でもそれではいけないと思います。どうするべきか考えました。普段から下処理を試みたり、食に関して食べるだけでなくいろいろな経験をしてみるといいと思います。僕も釣りを解剖をしたことで命について深く考えることができました。皆が様々な体験をして食や命について考えるようになってほしいと思います。

佳作

命のつながり

沖縄県糸満市立高嶺中学校三年

山やま城しろ万奈美まなみ

私が住んでいる沖縄本島南部の糸満市は、戦争で最後の激戦地となった場所です。激しい地上戦が起きた場所です。軍の人達だけでなく、罪のない多くの地元の人が犠牲となってしまったそうです。私の祖父母はそんな沖縄戦の体験者です。私が幼い頃は、戦争について、口を閉ざしていた祖父。私が中学生になり、平和学習をするようになってから、祖父母は、様々な事を教えてくれました。

当時祖父母は十歳だったけれど、あの頃の記憶をはっきりと覚えていました。祖父は当時家に両親、祖父母、弟二人と一緒に七人で暮らしていました。やがて戦争が始まると、屋敷の避難壕に家族で避難していききました。しかし馬を提供したり、屋敷を使わせたりしたそうです。日本軍に協力している家の家族は連隊本部壕の上にあつた壕を使つていいことになつたらしく、深い壕だったので、屋敷壕よりずっと安全だと思ひ、近くに住んでいた人と一緒に数十人が避難しました。私の祖父は、祖父母のために毎日家から二人の食料を運んでいました。しかし、いつもより飛行機の来襲が多かつたある日、突然壕へ弾が落ち、天井が崩れ落ちました。幸いにも祖父達は壕の奥にいたため助かつたのですが、祖父のすぐ一メートルほど前まで落磐していたのです。助けを求める声や悲鳴が聞こえる中、辺り一面真っ暗で、壕の中に祖父達は閉じ込められてしまいました。しかし真っ暗な闇の中、わずかな光を見つけ、必死に土を掘り返してどうにか外に出ることができたそうです。この時の落磐で四十〜五十人ほどの人が亡くなつたそうです。この話を聞いた時、私はぞつと

しました。もしあと一メートル前に祖父がいたらと思うととても恐ろしいです。その後祖父はアメリカ軍の捕虜になりました。収容所生活を送つたり、弾薬処理の作業をさせられたりしました。弾薬の処理中に怪我をする人も多く、私の祖父も一度目をやられてしまい、二週間もの間、目が開けられないことがあつたそうです。祖母も同じく、戦争が始まつた頃は、親戚の壕に避難していました。しかし、壕の近くに爆弾が落とされたり、壕の中にガスを入れられたりして、無理矢理壕の中から追い出されました。その後軍の攻撃から逃れるために、島の壕を転々としている途中でアメリカ軍の捕虜となりました。

私の祖父母は、命からがら、今日まで生き延びてきています。祖父母がいるからこそ、父母がいて、私がいる。そう思うと、命のつながりの重さを痛感しました。祖父は今でも「どうしてあれだけの武力を持った、大きな国と戦争したのかと、今更ながら残念でならない。」「二度とこのような戦争を起こしてほしくない、それしか言えない。」と話してくれます。祖父の瞳の奥に込められた思いに私は涙が出てきました。祖父母は必死になつて生きてくれた。私の両親、そして私がいる。こんなにも豊かで、こんなにも幸せな毎日を通じている。「おじいちゃん、ありがとう。」そう言わずにはいられない。

現在、沖縄で問題になつている戦争体験者の減少により、戦争の話を直接聞くことができなくなつていきます。そこで私達が次の世代へ体験者の想いと声を届けていくことが、後に残された使命だと私は思います。祖父の言う通り、もう二度と戦争が起こらないように、沖縄戦を絶対に風化させないように、今を生きている私達に何が出るのか、何をすべきなのか、一人一人が考え行動すべきだと思います。

今の私にできること、それは、武力での戦は、決してやってはいけないと訴えること。祖父から痛ましい戦争の事実を正確に伝えること。そのために言葉を通し、言葉で伝える人になることです。世界中の人々の幸せと平和を願つて。

最優秀賞

如己愛人、力の文明から愛の文明へ

広島県盈進高等学校二年

伊藤 咲夢

すぐまた、八月六日と九日がやってくる。

私は広島を中心に、核廃絶の署名活動を仲間とやっているが、原爆をテーマに書いたり、発言したりするときは、意識して「ヒロシマ・ナガサキ」と並列して使用している。それは、地獄と化したあの日は同じ苦しみなのだから、核廃絶や平和構築への思いもまた同じであってほしいと願うからだ。違いはただ、苦しみを背負った日時と場所だけである。

私はこの視点で毎年、広島市と長崎市の平和宣言を読み比べている。昨年の両市の共通項をまとめてみる。

(1) 新型コロナウイルスの現状、(2) 被爆者の声、(3) 長年の反核運動の悲願であった核兵器を全面的に否定する「核兵器禁止条約」への署名と批准を日本政府に求めたこと。(広島は市民を代表する市長自らの訴えではなく、「被爆者の思いを誠実に受け止める」ようにと、婉曲的に政府に求めた)、(4) 前年の十一月に訪れたローマ教皇のことば、(5) 発効から五十年の節目にあたる核拡散防止条約(NPT)の役割やそれへの期待、(6) いまなお原爆の後遺症に苦しむ被爆者のさらなる援護の充実を政府に求めたこと。

一方、相違も見られる。長崎は例年どおり、「北東アジア非核兵器地帯構築」を政府に迫り、日本国憲法の平和の理念を永久に堅持するように求めた。広島は、直近の「黒い雨」訴訟において、原告勝訴を言い渡した広島地裁判決を意識し、「黒い雨降雨地域」の拡大に向けた政治判断を強く求めた。

通底するテーマは似通っていた。長崎は、世界に、対話による「信頼」の構築と、分断ではなく「連帯」に向けた行動を主張した。広

島は終始、「連帯」を呼びかけ、宣言中六度もこれを使用した。

決定的な違いは何か。長崎には、「放射能の脅威を体験したまちとして、復興に向け奮闘されている福島の方々に応援します」とあるが、広島には、二〇一三年を最後に「福島」の文字はない。広島は、「連帯」と言いつつ、福島は連帯する対象ではないと切り捨てているように私には感じる。私は中学一年の時からずっと、原発事故に翻弄されつづけている福島在住の知人と手紙などを通じてつながっており、彼らのことを忘れたことはない。

私は、この思いを、尊敬してやまない「核兵器廃絶をめざすヒロシマの会」共同代表の森瀧春子さんにつづけてみた。春子さんは、インドやイラクなどの世界の核被害者を直接訪ね、交流して調査し、また、何度も東日本大震災後の福島を訪ね、放射線被害に苦悩し、悲しむ人々と連帯しているからである。

「広島も長崎も福島も、実際に核被害を体験し、共通の問題を抱えているのに、また、広島にもたくさん福島から避難して来られているのに、福島に言及しない平和宣言は問題だと思う。私はこれまで、世界の核被害に苦しむ人々に直接会って、訴えを直接聞いてきた。だからこそ、特に若い人たちには、真実を見抜く目を養ってほしいと思う。寄り添うとは、ずっとその人の立場に立つこと。そして、現実を知って、現実を見て、その背景にあるものは何だろうかと考えることだと思います。」

原発の問題には、政治的判断もあり、さまざまな意見があることくらい私でも知っている。その上で私は、広島が福島を遠ざけることは、永井隆先生の「如己愛人」の精神に反すると考える。長崎は、「如己愛人」の精神に則って毎年、上記のような福島に向けたメッセージを発していると私には思える。

春子さんの父は被爆者運動の先頭に立った森瀧市郎さんだ。私は、彼が残したことが大好きで、私の核廃絶の行動指針になっている。「力の文明から愛の文明へ。」いま、私自身が、核という権力を包囲する愛を誰よりも感じて身につけ、行動に生かし、愛の「連帯」を果たす人にならなければならぬと思っている。

優秀賞

残されたもの

島根県立三刀屋高等学校二年

中^{なか}村^{むら}瑞^{みず}葉^は

私の曾祖父が、戦時中軍に在籍していた頃を書いた手記を残している
と知ったのは、小学校五年生の頃だった。

私の住む島根県雲南市は、長崎で被爆し以後平和を訴えつづけた永井隆博士の出身地であることから、戦争について考える機会が多
くあった。そういつたこともあり、戦争について少なからず興味の
あつた私は、曾祖父の手記を実際に読んでみたが、正直な所当時の
私には難しくて何が何だかよく分からなかった。

しかし高校二年生になった今、私は彼の手記を再び手に取った。
小学校の頃よりも成長し、様々な経験を積んだ今なら、前よりもしつ
かり理解できるのではないかと思つたからだ。祖母に手伝つてもら
い、家の押し入れから引っぱり出した数冊の自由帳を、少しだけ緊
張しながら開いてみた。

手記を読んでみてまず驚いたのが、文章全体が淡々としていたこ
とだった。戦時中のことを書いているのだから、てつきり辛く苦し
かったことがうらみがましく書きつらねられているのかと思つてい
たが、手記には戦地でも仲間と冗談を言い合つたような部分も散見
され、案外そういうこともあるのかと、私の戦争に対するイメージ
が少し変化するのを感じた。それでも、明るい話だけでなく手記の
中には明確に死の気配があつた。曾祖父も、何度も死の瀬戸際に立
たされていたようだった。目の前で仲間や上官が死んでゆく様を、

曾祖父はどう感じていたのか、私には想像もできなかった。

手記を最後まで読み終えた後、最後のページには曾祖母や、曾祖
父にとっては娘、孫である私の祖母や父の名前が記され、その人達
へ「ありがとう」と感謝の言葉が綴られていた。それを見た時、私
はなんだか泣きたいような気持ちになつてしまった。そこに記され
ていた人達は、どれも曾祖父があつた死と隣り合わせの戦場から生き
て帰つてこなければ出会えなかつたかもしれない人達だ。戦時中の
曾祖父は、国のため、天皇のために死ぬつもりでいた。そんな曾祖
父が、曾祖母や祖母たちと出会い、戦後を、平和をとつても大切に
かけがえないものだと思うようになったのではないか。そう考え
て私は、少し嬉しいような気持ちになつた。

私は、実際に戦争を経験した人にしか分からない平和の大切さや
尊さがあると、手記を読んで感じた。私達がそれを知るためには、
その人達から得られる話を元にするしかない。しかし、現在、実際
に戦争を経験した人は、高齢化によつてどんどん少なくなつてい
る。私の曾祖父も、ずいぶん前に亡くなつていいる。曾祖父はあまり戦
争の話をしなかつた、もつといろいろ聞いておけばよかつたと、祖
母は話していた。そんな状態の今、平和の大切さを伝えていく役割
は私達が引き継いでいかなければならないのではないだろうか。戦
争を経験した多くの人が感じたであろう平和の尊さを、二度と戦争
に苦しむ人が出てこないよう訴え続けなければならぬと改めて
思つた。

曾祖父にとつての平和の重さは、曾祖父にしか分からない。しか
し私は、残された手記や生前の彼の姿を心に刻んで、曾祖父にとつ
ての平和を少しでも考え、伝えていけるようにしていきたい。

佳作

生きることは幸せなこと

沖縄県KBC学園未来高等学校一年

砂川 安笑羅
すな がわ あんじえら

真つ青な穏やかな海、空に見守られている島、沖縄。かつて沖縄は一国としてアジアの国々と交流し、独特の文化が残っていた美しい島だった。今年の「行きたい県」のランキングでは三位だった。若者から見た沖縄は、海のレジャーが楽しめる楽園だ。

六月になるとテレビでは今から七十六年前の出来事が連日写し出される。学校では平和教育の一環として、沖縄戦の真実を伝え、命の尊さを学ぶ。中学一年生の時に「おじいちゃん戦争の話知っているの」と尋ねると、曾祖父は「思い出すのも辛い。でもあんじえらには話さないといけない。」と言って、一点を見つめ絞り出すように静かに話した。曾祖父が十八歳の時に沖縄戦があった。父親は病気で亡くなり、家族は母親と九人の子供たちだった。

戦争が始まると母親は子供たちを守るために必死だった。曾祖父は年長なので母の教えを聞き、下の弟妹を守るといふ使命感でいっぱいだった。壕に隠れていると、末の妹が泣き出し、兵隊に出された。安全な場所を探して歩き続けた。家族ははぐれないようにしっかりと手を繋ぎ歩いた。戦死者が折り重なるようにしている道は歩きづらく、その上に転んだりして大変だった。明るくなると空襲にあい恐怖に怯えながら逃げている。やっと壕を見つけ入れたが、弟が泣き又もや兵隊に壕から出された。それからヤンバルに向かって歩き続けた。母は子供たちのために安全を確認しながら、先を歩いていた。突然ものすごい音がして、母の頭上に爆弾が落ちた。子供たちの目の前で母の体がバラバラになり、顔もなくなり飛び散った。この悲

惨な残酷な出き事にみんな泣き叫んだ。曾祖父は「泣いている時ではない。弟妹を守らなければならぬ」と強い気持ちを持ちつづけヤンバルを目指してひたすら歩いた。「お母さん、お母さん」と一人が泣くと皆泣いた。小さい弟妹たちは泣き疲れて歩きながら寝てしまふ時もあった。壕に避難させると外に出て、倒れた木から実を取り、食べられそうなやわらかい草を引っこ抜き食べさせた。

ヤンバルの途中で米兵に捕まり、捕虜収容所に連れていかれた。殺されると思ったがそこでは食事も食べさせてもらい助けられた。数日収容所にいると、戦争は終結した。残された九人の家族は誰一人負傷せず助かった。子供たちだけで空襲の中逃げて逃げる道々に計り知れない戦没者がいる中、残された九人の子供たちが全員生き抜いたのは曾祖父が導いた奇跡だと思う。三人の妹たちは、今も元気に生きている。

私は沖縄人の母とアメリカ人の父の長女として生まれた。曾祖父は二人の結婚に猛反対した。過去に敵同士だったことが若い二人にも影響した。しかし、若い二人には憎しみを持たず、愛し合い、私が生まれた。反対した理由は、母親を米軍機からの空襲で亡くしたことだった。しかし、曾祖父は私が生まれると私をとてても可愛がり「生きていると可愛い曾孫にも会えて幸せだよ。戦をしては絶対にいけない。」

私は今、野球コースのマネージャーをしている。沖縄は野球が盛んで、県大会から甲子園までテレビ観戦に釘付けになる。そのきっかけを作った人が沖縄戦直前に、県知事として赴任し、戦中五ヵ月足らずの最後の知事「島田叡」さんが、沖縄の子供たちに野球のおもしろさを指導したからだ。国に反して「生きる」と指揮をした知事だった。糸満のどこかの壕で自爆したことが確認されている。東京大学の野球部だったので戦後七十六年たった今も、後輩たちが毎年南部の壕で収骨するために来沖している。そんな尊い命を失ったこの地の土砂を、今辺野古の海に新基地を作る埋め立てに使おうとしている。戦没者の遺骨が収骨されているので、私は反対します。

佳作

愛は平和のために

島根県立平田高等学校一年

田^た中^{なか}悠^{ゆう}真^ま

愛は尊重され、平和の下で生まれ、そして新しい世代に注がれるべきである。そう思いつつも、私は愛の持つ力がどうしようもなく恐ろしく思える時がある。例えば戦争映画を見た時だ。戦地へと赴く男たちは、懐に愛する家族の写真を忍ばせていた。そして絶望的状況に陥った時、彼らは家族の写真を取り出した。この様な行動は各国従軍者の著作や証言にも散見され、現実でも数多く起こってきたことなのだと分かる。紛れもない現実の出来事だ。

そんな状況が映し出されたとき、ふと疑問に思うことはないだろうか？その映像はつまり、家族写真を見つめ銃に弾を込めたならば、人は現実において殺人さえもできてしまう。ということを確認にそして冷徹に映し描いているのだ。訓練で習った通りに照準を合わせ、引き金を引くと弾が発射される。それが当たれば、運が悪いと死ぬ。映像として映し出されたあの描写に隠された重要な部分は「家族を愛し、再び会いたいと思う気持ちは、不本意であつても人を殺す原動力足りえる。」ということだと私は思う。

現代の国際法では、戦時下の戦闘行動においての殺人は罪に問われない。しかし、その様な法に裁かれる裁かれないは、もはや根本的問題ではない。一人ひとりの愛すらも燃料に変えてしまう戦争が、人に殺人の勇氣をも与えてしまう愛の力が、私はどうしようもなく、怖く思ってしまうのだ。もちろん、本来の愛は温もりを帯びた、まるで春のうららの様に穏やかなものであると、私自身も心ではわかっている。

前述した兵士たちの話の様に、戦争を陰から支えている愛は、家族愛や愛国心だけではない。友愛や宗教愛（信仰心）などの様々な

形の愛が戦争行為の燃料にされ、それは現代においても続いている。第一次世界大戦の引き金となったサラエボ事件、原因を紐解けばそれは、青年たちの祖国愛だった。現代まで続く宗教対立なども、原因は己の信じる宗教への確固たる愛だ。身近な例は時代劇にも出て来る敵討ちだろう。人々や武者達が敵討ちに至るのは、友愛或いは親愛の類が原因の場合が多い。故に人々は、敵討ちという最上級の愛に魅せられるのだろう。

最初に著した通り私は、愛とは平和の下で正しく生まれるべきであり、そうして生まれた愛が、分け隔てなく注がれるべきであると強く思う。だが、それは容易な話では無い。現に世界は平和ではなく、身近な環境においても諍いの無い状態を維持し続ける事は難しい。ならばどうすれば、愛が伸びやかに生まれ、そして注がれる環境を作れるのか。どの様に心掛けたなら、愛が争いの燃料にされない世界が目指せるのか。その答えを探していると私は、永井隆博士が残した言葉「己の如く人を愛せよ」に帰結した。そして永井博士が信仰されていたキリスト教にも、似た言葉があった事を私は知った。キリスト教ではそれを「無条件の愛」と言う。

「無条件の愛」や「己の如く人を愛せよ」の様に、他人を自分の如く労り、他人を自分の如く想えたならば、相手の胸にナイフを突き立てる様な事は起きず、相手を差別し、罵り辱める事はできないだろう。

たとえこの永井博士の言葉が、原文の通りで伝わらなかつたとしても、永井博士が未来に託した平和への思いが、今を生きる全ての人に理解され、共感される事を私は望む。

博士の言葉の様に、見知らぬ誰かをも愛せる日が来たならば、その明日はきっと素晴らしい日なのだろうと私は信じる。そんな理想の日を目指して、小さな、ほんの小さな一歩を、今日も私は踏み出した。

「お疲れ様、気をつけて帰れよ。」

私の声を聞いた友の顔は、少しはにかんでいるようで、私も少し嬉しくなった。

佳作

握られた想い

埼玉県芝高等学校二年

中山 公太郎
なか やま こうたろう

良く味がしみ込んだ煮物に、砂糖たっぷりの甘いおはぎ。曾祖母はいつも大量に作っては、近所へ配りにまわる。「たくさん作った方が美味しくできる。それと『美味しい』は心の扉を開く魔法だよ。」と大鍋を前に話す姿には、何か魅了されるものがあった。その言葉通り曾祖母は常に多くの人々に囲まれ、愛される存在であったのは確かだ。反面、僕は時代に合わない行動に苛立ちを覚えていた。

豊かな人生を送りたければ、他人より秀でなければならぬ。「皆で頑張ろう」など見え透いたスローガンは、ただの偽善でしかない。己のテリトリーに城壁を築き自己防衛をしなければ、この時代を生きていくのは難しい。皆、自分を守る事に精一杯なのだ。曾祖母のように、「赤の他人に、きちんとご飯を食べているのか」などといったプライベートに踏み込む行為は、論外だ。そんな僕の心の中を知ってか知らずか、曾祖母はただ一言「みんなが食べていければ、それでいいのだ。」と。

世界の飢餓、子供食堂といった食糧援助が必要とされる一方で、食品ロスによる廃棄物が増す世の中。年間、世界への食糧援助量の一・六倍もの食品が国内で廃棄されている現状に、曾祖母の「みんなが食べられれば」の言葉が頭の中を駆け巡る。世の中の不条理さに、怒りと情けなさとの狭間にいる自分がいた。戦争体験者である曾祖母からしてみれば、日本はなんて贅沢で薄情な世の中へと変わってしまったのだと思うに違いない。僕が曾祖母の良き理解者であったならば、見えてくる世界は違ったのだ。それに気付き始めると、

曾祖母の姿を思い出すようになった。

戦争中の配給制度は、皆にお腹いっぱい食べさせることを生きがいとしていた曾祖母にとって、苦しいものであった。しかし、そんな状況下でも、曾祖母の信念は曲がることなく無かった。近所で協力し畑を耕し、採れた野菜は大鍋で炊かれ、近くの工場こうばで働く外国人にも躊躇なく振る舞われた。戦火を逃れてきた者に対しても、負傷兵に対しても。曾祖母は、あらゆる者に分け隔てなく接することができる人であったと、後に僕は曾祖母を慕う人から知ることとなった。

物が溢れ豊かになる一方で人間関係が希薄になった今の時代と、明日の食べ物に苦しむが人情に溢れていた時代。果たして、僕等は何を「幸せ」と感じて生きているのだろう。この二つの道のどちらかを選択せざるを得ないならば、「正解」はどちらなのか。曾祖母が握った甘いおはぎを食べ、皆が自然と笑顔に包まれたことを思い出す。そんな平穏な暮らしを「幸せ」と言わずして、何と云うのか。

「戦争の惨禍は二度と繰り返してはならない。唯一の被爆国として、日本は多くの事を伝えなければならぬ立場にある。」教科書に書かれている言葉だ。僕は、そこに戦争の悲惨さだけでなく、人を慈しむ姿はどんな逆境をも乗り越える力であることを付け加えたい。永井隆博士が「如己愛人」と説き、多くの人に向けた愛の精神が、平和になった今の時代にも人々の指針であることは言うまでもない。

人への感謝、平和な世の中が続くことへの願い、それと苦しい時ほど人の為に動ける力。それらは「絆」という魔法になって甘いおはぎの形になる。僕にその魔法をたっぷり振りかけ、曾祖母の人生は静かに幕を下ろした。最後に握られたおはぎは、曾祖母の全ての愛を表すかのように大きく、優しい甘さに包まれていた。

いまでも僕にかかった魔法は、甘いおはぎの記憶と共に生き続けている。次世代を担う僕たちは、今後多くの岐路きろに立たされることとなる。しかし、「愛」という普遍的な美ひさ見え失わなければ、決してその道を誤ることは無い。そう言えば、母もよく近所にお裾分けをしに行く。母も幼い頃、曾祖母の魔法をかけられたのだろうか。

佳作

永井隆博士の遺産

鳥取県立米子東高等学校三年

藤井 みどり

国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）憲章は、前文の冒頭が次の一文で始まる。

「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」

ユネスコ憲章は第二次世界大戦が終わってまもない、一九四五年十一月に起草され、翌一九四六年十一月に発効された。永井隆博士が白血病と闘いながら執筆活動を始めた頃である。ユネスコ憲章は博士の思想と一致する点が多い。『いとし子よ』には、次のような記述がある。

「何年かたつうちに、いつしか心が変わり、何となくもやもやと戦争がしたくなってくるのである。どうして人間は、こうも愚かなものであるのか？…愛で身をかため、愛で国を固め、愛で人類が手を握ってこそ、平和で美しい世界が生れてくるのだよ。」（『永井隆全集』二八一―二八二頁）

私は、ユネスコによって登録された世界遺産に興味を持ち、これまでに国内外の世界遺産十数か所を訪れた。「広島平和記念碑（原爆ドーム）」もそのひとつである。また、世界遺産検定を受検し、その度に「ユネスコ憲章」や「世界遺産条約」を読み返してきた。世界遺産を通して、私たちは文化や人、自然の多様性、普遍性を学ぶことができる。相互理解を深め、互いに尊重し合うことを促す役割を見出す。戦争のない社会をつくるための「平和のとりで」のひとつが、世界遺産条約である。

世界遺産には、「負の遺産」と呼ばれるものがある。戦争や人種差

別など、人間が犯した過ちを後世に伝え、二度と繰り返さないよう教訓とするものである。原爆ドームやアウシュビッツの収容所などが「負の遺産」として知られている。

この夏、私はリニューアルされたばかりの雲南市永井隆記念館を訪ねた。壁一面に展示された多くの資料や写真は、どれも他人を愛することや平和への願いを表現していた。博士はその思いを色紙に著すとともに、受け取った手紙に丁寧な返事を書いた。ドラマにもなった〈長崎の鐘〉の作曲者、古閑裕而への手紙もあった。絵や書などが添えられたものも多く、博士が相手を思いやり心を込めて書いたことがよく伝わった。また、私は、博士とやりとりをした人が手紙や資料を大事に保存していたことに感銘を受けた。博士の「如己愛人」の精神が周囲の人々にも大切にされてきたのだと思った。

ユネスコは一九九二年から、世界遺産事業の一環として新たに「世界の記憶」（記憶遺産）の登録を始めた。現在、日本からは七件が登録されている。広島では、原爆文学資料の記憶遺産登録をめざす活動が行われている。峠三吉、原民喜らの直筆資料が対象になっているという。

私は、永井博士が残した直筆の資料こそ記憶遺産としてとどめていくべきものだと思う。そして、私は将来、世界遺産に携わり、遺産を守る側、伝える側に立ちたいと考えている。『この子を残して』に「遺産」という節がある。そこには、次のように書かれている。

「私はこの二人の子にのこす遺産を何ひとつ持っていない。……美しい思い出をのこしてやりたい。潔い思い出をのこしてやりたい。ゆかしい思い出を残してやりたい。」（『永井隆全集』一四五―一四六頁）

そのようなことはない。永井博士が私たちに残してくれた遺産はあまりに多い。博士の遺産は、愛と平和を願う美しく、潔く、ゆかしい遺産である。

引用文献 永井隆『永井隆全集』、一九七一年、講談社

最優秀賞

繋がり

島根県

宮本文子

七十五回目の終戦の日。「あの時、姉がいなかったら今の僕の存在はなかったかも知れないんだ。」と言ったのは一歳違いの弟。それは私達の人生で大きな岐路となる忘れ得ぬ体験だ。

この日の正午。玉音放送を旧満州の疎開先で聞く。私（小五）弟（小四）。何がどうなりどうなっていくのか皆目見当もつかない。

間もなく「奉天方面への最後の列車が出るらしい。一時間以内に脱出。営口駅へ向う。」とのこと。母三十二才。六人の子供といところのお姉さんの八人。皆に遅れないように歩いた。母は二才の弟を背負って「絶対に手は離さないこと」と。幼い弟妹達も切迫した空気を感とり無言。通路は押し寄せる現地人。ひたたくり行く手を阻む。恐怖を背に、手をつなぎ合い駅到着。その道は辛く遠かった。

列車は停っていた。あれに乗り込めば、ひとまず安心だ。沢山の人が待っていた。

我先にと乗り込み始める。押されるように母と弟妹が乗り込む。残ったのは、いとこと私と弟。「もう乗れない。この後臨時列車が出るらしいから…」ここで別れたら最後だ。直感的に「残るのは嫌だ。絶対に駄目だ。」と叫んだ。涙ながらに訴え続けた。弟は黙って私の手を握りしめている。ホームには三人がぼつんとつつ立っていた（ように思えた。）訴えが功を奏し、車窓から引つ張り、押し上げて乗せ

てもらえた。揺すられるうちに荷物の上から通路までずり落ち眠っていた。

私は幼い頃から無口で頼りない姉だったと思う。冷静でしっかり者の弟は私のお目付役的存在で何をするのも一緒だった。その時のことを「姉が見たこともない形相で怒ったんだ」と語った。必死の思いは伝わっていたのだ。脳裏に焼き付いて離れなかったこの瞬間を私も弟も今まで黙して語らなかつた。まかり間違えば残留孤児にもなりかねない瞬間だった。私が生涯忘れることのないこの記憶を、弟も共有していたのだ。胸の締め付けられる思いが甦った。そして姉の面目も保たれていたことも初めて知った。自分を守り抜く力は当然必要だ。あの時の行動は、咄嗟の判断であった。そして切端詰った時の、思いもよらぬ力があつたと思う。

列車は奉天駅に着く。その後は大人に守られ社宅まで辿り着けた。集団の強い絆の中の安心感と有難さは子ども心に忘れられない。

父は戦況劣勢の末期に召集され、現地を転々と移動。その日は韓国济州島にいた。父の召集後は会社から手厚い保護を受けていた。終戦直後には責任者が機転を利かせ「社員貯金」を即座に引き出し配分したと母から聞いた。戦中戦後、何とか生活できていたことに納得した。感謝であった。戦後の社宅には、有刺鉄線が張り巡らされ守られていた。一年後、引き揚げが始まった。社宅の方々と一団体を作り、助け合いながらの移動だった。ある時は徒歩で、ある時は貨物列車（無蓋車）で、出航港のある「葫蘆島」へ。貨物船に乗り込めた時は、姉として弟妹を守り通せたと思えた。数日間の船旅。舞鶴港へ接岸した。海も山も川も知らずに育った私は甲板から見ると山の緑に圧倒されていた。苦楽を共にした皆さんとの別れ。お互い

有難うを交わし、それぞれの故郷へ散っていった。

六人の子供と無事故郷の土を踏むことができた母。その心労は計り知れない。母の優しさ、厳しさを子供達は忘れていない。皆、健在で、それぞれの道を歩ませてもらった。

八十代も後半の私。今、何故、重い口を開こうとしたのだろうか。理解し難いこの特殊な体験が今の世代に通じるはずもない。しかし弟の一言に触発されたのは事実。口に出さなければ伝わらないのだ。時代は移っても生き方の根底にある心の持ち方や考えは、世代を超えて変らないはずだ。家族愛・周囲との良い関係があつてこの平穏は保たれている。

ここまで生かされた幸せは後世の人々に伝えたい。人間関係の稀薄になりがちな現代であるからこそ強く思うのかもしれない。

日常生活を支障なく送れる期間を「健康寿命」と呼ぶそうだ。自分で言うのもおこがましいが、今のところ私は大丈夫だ。個々の生活は自立の上に成り立つ。しかし人は一人では生きていけない。認め合い、助け合い繋がりあっている。私には私を認める家族がいる。友達がいる。知人がいるのだ。充分に、その期間にあると自負している。

永井隆博士と父は、旧制松江中学の同期（四十五期）であつたと聞いていた。中学生になつていた私達にその著書を買ひ与えてくれたことも鮮明に記憶している。

記憶を呼び覚すと、今までの、繋り合いの上に現在の自分があり、穏やかな毎日があることを再認識したのであつた。

優秀賞

あの子らの丘で

長崎県

立木英夫

私は元小学校の教師で現職中は決して功績は残せなかったが、私にはある女の子との宝物のような思い出がある。

それは私が平和教育で有名な小学校に転勤になったときのことだ。私はその学校で担任ではなく、高学年の算数を担当することになった。授業以外で私の居場所はなく、ほとんど職員室で過ごすことが多かった。

その日も、私は三時間目の授業を終えて、職員室で今日の算数プリントの添削作業をしていた。

外で悲鳴のような声がした。何だろうと外に出てみると、原爆資料室の前に一人の女の子が泣きそうな顔で立っていた。

女の子は私を見ると、私の腕にしがみついてきて、「先生、一緒に入ってください！」

と、すぐるような目で私に言った。

原爆資料室は職員室が入っている本校舎とは独立した別の棟にある。被爆校である本校ならではの平和施設である。中には被爆の写真パネルや被爆の遺物等が展示されていて、修学旅行や観光客にも自由に閲覧できるように開放されている。

女の子は中の写真を見ようと部屋に入ったものの、だんだん怖くなって飛び出してきたと言った。本校の二年生できちんと喋る賢そ

うな子どもだと思った。しかし、今は授業中のはず、二年生の子どもが一人でいる時間ではない。私はその女の子に早く教室に戻るように言った。でも、私がいくら説得しても、女の子は私の腕を離そうとしなかった。よほど写真を見たいらしい。そして、とうとう私は根負けをして、女の子に写真を見たら教室に戻るという約束をして、女の子の願いを受け入れることにした。

なんだかお化け屋敷に入るように二人で資料室に入った。写真を見ていくうちに女の子の私の腕を握る力が強くなった。

写真を見て、女の子は怖いと言った。背中が火傷がひどい人の写真を見て、「この人、死んだの？」と私に聞いた。ここには目を背けたくなるような悲惨な現実がある。そして、それを怖いと思う子どもの現実もある。教員になって何度も見た写真だが、今日は女の子の感性を通して悲しみが私にひしひしと伝わってきた。女の子はいつのまにか泣いているようだった。その横顔を見ながら、この子はどうして原爆の写真を見たかったのだろうかとぼんやりと考えた。

資料室で過ごしているうちに午前の終わりのチャイムが鳴った。私は、もつと見ていたいと渋る女の子の手をつないで女の子の教室まで送っていった。

教室の入口で担任を呼ぶと、

「あらあなた、いなかったの？」

と言い、その後無言で女の子を教室に入れた。

女の子を送った帰りに私はもう一度資料室を訪れた。誰もいない部屋の中で、私は一枚の風景写真と向き合う。

女の子には話さなかったことがある。私の母はこの写真のどこかで被爆している。父も復員後、母を探して入市被爆をしている。私

はれつきとした被爆二世なのだ。しかし、父と母は亡くなるまで被爆したことを私たち子どもに多くを語らなかつた。私も教員としてそのことを胸に秘めて生きてきた。

私は明日、あの子にそのことを打ち明けようと思う。そのことで父母の人生と向き合おうと思う。

翌日、昼休みになって資料室を訪れると、あの子がいた。今日は抜け出さず来てないよとペコリと頭を下げた。

それから、昼休みになると毎日のように資料室へ行った。そこで私たちは飽きることなく写真を見て過ごした。放課後は資料室の二階の児童図書館に行った。ここには平和関係の本がたくさんあって、私たちは平和の絵本を読んだり、紙芝居をしたりして過ごした。どうして戦争はおこるのだろう、と女の子はふいに私に聞いた。どこかで疎外されてきたこの子は人を憎むことを知らない。戦争はね、人と人が憎しみ合っておこるんだよ、そう言おうとした時、女の子の無垢の美しい瞳に見つめられて私はその言葉をのみ込んだ。

夏休みに入ってすぐ、女の子は突然転校して行った。そして、私たちの平和学習も唐突に終わりを告げた。

それから十年の月日が経ち、私は縁があつてこの学校に再度転勤してきた。

私はあの子らの丘に立って祈りを捧げている。あの女の子は高校生平和大使になったと人づてに聞いた。私はなぜかそれが誇らしくてたまらなかつた。

あの子らの丘の上で見上げた空はどこまでも青かつた。

佳作

こころと言葉

島根県

板持佳奈

言葉は様々な姿を持っている。時に人を導く光となり、時に人を傷つける刃物となる。それくらい、言葉には不思議な力がある。傷ついた心は、簡単に癒えない。再び立ち直る為には、それなりの時間を要する。その時間は一人ひとり異なり、全ての人が即立ち直ることができるわけではない。一つ間違えれば大人になっても克服することが困難になり、苦しみ続ける。私もその一人だった。

私は別室登校と不登校を何度も繰り返した。当時、周囲の人の目や声がとても恐ろしかった。私の容姿や行動を嗤い、非難されているように感じていた。教室に居ることが苦痛で、別室登校から戻ることが難しかった。そんなある時、面談で先生から「お前は弱い。」「甘えと同じだ。」「また逃げるつもりか。」「普通じゃない。」と繰り返言われた。助けてくれると信じていた大人が、信頼できると思っていた学校の先生が、一気に信じられなくなってしまった。そして学校に行くと呼調を崩し、過呼吸が頻繁に起きるようになった。

「私は弱い。普通じゃないから、生きていても迷惑な存在なんだ。こんな私なんか、消えてなくなればいいんだ。」

絶望に呑まれ、自分のことが大嫌いになり、何度も死を選択しようとした。しかし死や痛みに対する恐怖に負け、命を絶つことは出来なかった。死にたくても死にきれない苦しさは、言葉で表すことが

難しい。ただ両親や友人の悲しむ顔を見たくない、心配させたくないと思っていたことは確かだ。自分の心に蓋をして、人との間に壁を築き、限界まで私は追い詰められていた。療養してある程度立ち直ることができたが、私は人と関わることや、すれ違う人々に恐怖感を抱くようになってしまった。十年以上経った今もまだ、私の中には当時受けた言葉や視線が、傷跡として残っている。私は人間不信に陥った。一時は交友関係も断ち、自分から孤立しようとしていたほどだった。誰も信じる事が出来ず、差し伸べられた手すら振り払うほどだった。その結果、私は人の輪に入ることが困難になってしまった。

自ら孤独になろうとしていた私が再び希望を見出すことが出来たのは、ある方の存在が大きかった。

「弱いわけではなく、難しい。個性を引き出すことが難しいだけ。」深い意味はなかったかもしれないが、それは私の心に強く響いた言葉だった。そして当時の私が聞いていたら、違う人生を送れたのかもしれないと思った。しかし過去を変えることは出来ない。変えられるのは未来だけ。あの言葉を機に私は、自分のことを少しずつ受け入れたいと思うようになった。そして、私の生活を大きく変えるきっかけになった。時間が自分にとって有意義なものになるように、意識して過ごすようになった。『弱い人』ではなく『難しい人』と言換える。それだけで言葉のトゲは、まるくなる。ネガティブな言葉も、言い方を変えることで柔らかい表現になる。そして人を生かすことも、殺すことも出来るのが『言葉』だ。

最近は様々なメディアで、暴力的な言葉や弱者を非難するような言葉が増えているように感じている。時々私も、他人に対して不愉快

快な感情を抱くことはある。しかしそれを全て口にするとうなるだろうか。自分も相手も不愉快な気持ちになるだけだ。周囲へ負の感情を拡散・連鎖させない為には、我慢や沈黙も時に必要だろう。言葉は扱いがとても難しいが、私達が生きていく上で切り離すことのできないコミュニケーションツールの一つだ。そして今日、インターネットが生活の中に浸透したことで、自分の意見を気軽に発信することが可能になった。この現代社会で生活していく上で、私達は言葉一つ一つの重みを再確認する必要があるだろう。

過去を悔い、人を恨み続けても何も変わらない。先に進む為には、自分を受けとめ、他人を許すことが必要だった。あの時死ななかつたから、今の私が居る。険しい道を歩いてきたからこそ、出会えた人達が居る。私が経験したことは、全て無駄なことではなかつた。自分のことや外の世界を悲観的にしか見られなかつたけれど、今なら自信を持つことができる。

「生きていて、よかつた。」

第31回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

勝部利音	ふつうって、しあわせだな	島根県	雲南市立三刀屋小学校一年	最優秀賞
古田悠樹	いっしょにはしるとたのしいよ	島根県	雲南市立鍋山小学校一年	優秀賞
陶山愛	わたしにもできるかな	島根県	雲南市立三刀屋小学校一年	佳作
佐々本琉雅	みんながえがおになるために	島根県	雲南市立掛合小学校二年	佳作
中西臯月	よこどうを見て思い出すよ	島根県	雲南市立三刀屋小学校二年	佳作
小林映心	友だちをたいせつに	島根県	雲南市立鍋山小学校二年	佳作
石橋夏希	雲南市めぐり	島根県	雲南市立掛合小学校三年	
名原大輝	ぼくが心がけたいこと	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	

【小学生高学年の部】

上原諒	遺骨と私たち	沖縄県	糸満市立糸満南小学校四年	最優秀賞
内田七夢	自分らしさを大切にして	島根県	雲南市立西小学校六年	優秀賞
勝部瑤望	あたりまえを感じる心	島根県	雲南市立阿用小学校六年	佳作
名原凜香	こわかった一日	島根県	雲南市立鍋山小学校四年	
大谷はな	周りの人を大切に	島根県	雲南市立田井小学校六年	
狩野愛	わたしのひいおじいちゃん	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	
高田琉玖	身近な平和を守るために	島根県	雲南市立大東小学校六年	
錦織幸歩	命と曾祖父	島根県	雲南市立大東小学校六年	
藤原愛生	そういうものに私はなりたい	島根県	雲南市立三刀屋小学校六年	
森屋結愛	平和で平等な世界をつくるためには	神奈川県	捜真小学校六年	

【中学生の部】

片岡瑞彩	「平和」のために	島根県	島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程九年	最優秀賞
レイフィールド 快	一つの命を何度も殺す	沖縄県	西原町立西原中学校二年	優秀賞
来海良宣	食と命	島根県	雲南市加茂中学校一年	佳作
山城万奈美	命のつながり	沖縄県	糸満市立高嶺中学校三年	佳作
川原愛梨	私の核廃絶〜誰もがやらねばならぬこと	広島県	盈進中学校二年	佳作

園田瑞季
荒木優菜

小さな平和から
戦争の色・平和の色

神奈川県
島根県

捜真女学校 中学部二年
雲南市木次中学校三年

【高校生の部】

伊藤咲夢
中村瑞葉
砂川安笑羅
田中悠真
中山公太郎
藤井みどり
西山佳穂
久保田孝多
宮崎華

如己愛人〜力の文明から愛の文明へ〜
残されたもの
生きることは幸せなこと
愛は平和のために
握られた想い
永井隆博士の遺産
自分色って何色？
未来が平和であり続けるように
真の「平和」実現に大切なこと

広島県
島根県
沖縄県
島根県
埼玉県
鳥取県
神奈川県
沖縄県
千葉県

盈進高等学校二年
島根県立三刀屋高等学校二年
KBC学園未来高等学校一年
島根県立平田高等学校一年
芝高等学校二年
鳥取県立米子東高等学校三年
日本大学藤沢高等学校
KBC学園未来高等学校三年
跡見学園高等学校三年

最優秀賞
優秀賞
佳作
佳作
佳作
佳作

【一般の部】

宮本文子
立木英夫
板持佳奈
平松葉純
小松崎有美
田中洋子
山本悦生
尾中潔
高村聖恵
橋宣茂
佐野孝子

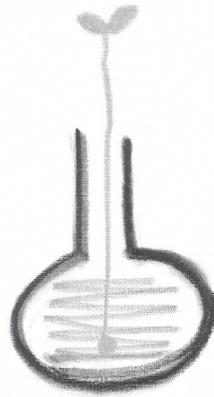
繋がり
あの子らの丘で
こころと言葉
小さな愛
愛の世界へ、愛のひとつに
人を思うこと
もう少し平和の種をまいていく
究極の日常
「想いは時を越え平和を紡ぐ」
足元から
6才の戦争体験

島根県
長崎県
島根県
静岡県
埼玉県
島根県
島根県
熊本県
熊本県
広島県
島根県

最優秀賞
優秀賞
佳作
佳作



NO



YES

KU
2007. 8. 26